

# 錢湯

泉鏡太郎

青空文庫



それ熱ければ梅、ぬるければ竹、客を松の湯の揚場に、奥  
 方はお定りの廂髪。大島擬ひのお羽織で、旦那が藻脱の  
 籠の傍に、小兒の衣服の紅い裏を、膝を翻して控へて居る。  
 髯の旦那は、眉の薄い、頬の脹れた、唇の厚い、目色の厳しい猛  
 者構。出尻で、ぶく／＼肥った四十ばかり。手足をぴち／＼  
 と撥ねる、二歳ぐらゐの男の兒を、筋鐵の入った左の腕に、脇  
 へ挟んで、やんはり抱いた處は、挺身倒に淵を探つて鱒を生  
 捉つた體と見える。

「おう、おう。」

などと、猫撫聲で、仰向けにした小兒の括頤へ、動りを

くれて揺上げながら、湯船の前へ、ト腰を抜いた體に、べつたりと踞しゃがんだものなり。

「熱い、熱い、熱いな。」

と手拭てぬぐひを濡しめしては、髯ひげに雫しづくで、びたくくと小兒こどもの胸むねを浸ひたしてござる。

「早はやう入れとくれやせな。風邪かぜエひきすえ。」

と揚場あがりばから奥方おくがたが聲こゑを懸かける。一寸ちよつと斷ことわつて置おくが、此この方は裸體らたいでない。衣紋えもんたゞ正ただしくと云いつた風ふうで、朝あさからの厚化粧あつげしやう、威儀備ゐぎそなはつたものである。たとひ紋着もんつきで袴はかまを穿はいても、これがうらはら反對さつそくで、女湯をんなゆの揚場あがりばに、待つ方まが旦だんと成なると、時節柄じせつがら、早速さつそく其その筋すぢから御沙汰ごさたがあるが、男湯をとこゆへ女をんなの出入でいりは、三馬さんばい

來大目に見てある。

「番頭にうめさせとるが、なか／＼ぬるならん。」

と父様も寒いから、湯を浸した手拭で、額を擦つて、其の  
手を肩へまはして、ぐしやく／＼と背中を敲きながら、胴震に  
及んで、件の出尻の据らぬ處は、落武者が、野武士に剥がれ  
た上、事の難儀は、矢玉の音に顛倒して、御臺御流産の體と  
も見える。

「ちやつとおうめやせな、貴下、水船から汲むが可うすえ。」  
と奥方衣紋を合せて、序に下襦袢の白い襟と云ふ處を厭味  
に出して、咽喉元で一つ扱いたものなり。

「然ぢや、然ぢや、はあ然ぢや。はあ然ぢや。」と、馬鹿癡子に

うか  
 浮れたやうに、よいとこまかして、によいと突立ち、腕に抱いた  
 ことも、むね、もひとつ頤を壓へに置くと、勢必然として、取つた  
 小兒の胸へ、最  
 りと云ふ仕切腰。

かよひぐち  
 ささて通口に組違へて、角のない千兩箱を積重ねた  
 とめをけ  
 留桶を、片手掴みで、水船から掬出しては、つかり加減な  
 ところねら  
 處を狙つて十杯ばかり立續けにぎぶくと打ちまける。

なほもつ  
 猶以て念の爲に、別に、留桶に七八杯、凡そ湯船の高さ  
 こほ  
 まで、凍るやうな水道の水を満々と湛へたのを、舷へ積重  
 おくがた  
 ねた。これは奥方が注意以外の智慧で、ぎぶくと先づ搔  
 は  
 して、

よ  
 「可からう、可からう、そりやぎぶりとぢや。」と桶を倒にして、

小兒こどもの肩かたから我わが背中せなかへ引ひかぶせ、

「瀧たきの水みづ、瀧たきの水みづ。」と云いふ。

「貴下あなた、湯瀧ゆだきや。」

と奥方おくがたも、然さも快こころささうに浮うかれて言いふ。

「うゝ、湯瀧ゆだき、湯瀧ゆだき、それ鯉こひの瀧昇たきのぼりぢや、坊ぼうやは豪えらいぞ。そ

りやも一ひとつ。」

とぎぶりと浴かけるのが、突立つつたまゝで四邊あたりを構かまはぬ。こゝは

英雄えいゆうの心事しんじ料はかるべからずであるが、打ぶちまけられる湯ゆの方ほうでは、

何なんの斟しん酌しやくもあるのではないから、倒さかしまゆだきさんぜんちやう

場ば一面いちめんの土砂降どしやぶり、板いたから、ばちやくと澆はねが飛とぶ。

「あぶ、あぶ、あぶ、あツぷう。」と、圓まるい面つらを、べろりといたいけな

手で撫でて、頭から浴びた其の雫を切つたのは、五歳ばかりの腕  
 白で、きよろりとした目でひよいと見て、又父親を見向いた。

此の小僧を、根附と云ふ身で、腰の處へ引つけて、留桶を前

に、流臺へ蚊脛をはだけて、瘦せた仁王と云ふ形。天地啊呷

に手拭を斜つかひに突張つて、背中を洗つて居たのは、刺繡

のしなびた四五六の職人であつた。

矢張御多分には漏れぬ方で、頭から今の雫を浴びた。これが、

江戸兒夥間だと、氣をつけろい、ぢやんがら仙人、何處の雨

乞から來やあがつた、で、無事に濟むべきものではないが、三

代相傳の江戸兒は、田舎ものだ、と斷る上は、對手が戀の仇

でも許して通す習である。



「此方へ來ねえ。」

とばかりで、小兒を、其の、せめても雫に遠い左の方へ、腕を  
つか 掴んで居直あなほらせた。

旦だんは洒しやあ々々としたもので、やつとこな、と湯船ゆぶねを跨またいで、ぐ

づく／＼と溶とけさうに腰こしの方ほうから崩くづれ込みつゝ、眞まつ直すぐに小兒こどもを

抱だき直なほして、片手かたてを湯船ゆぶねの縁へり越こしに、ソレ豫かねて恚かくあらんと、其そ

處こへ遁にげ路みちを拵こしらへ置おく、間道かんだうの穴あな兵糧びやうらう、件くだんの貯蓄たくはへの留とめ

桶けの水みづを、片手かたてにぎぶ／＼、と遣やつては、ぶく／＼、ぎぶ／＼

と遣やつては、ぶく／＼、小兒こどもの爪つま尖さき、膝ひざから、股また、臍へそから胸むね、

肩かたから咽喉のど、と小ちひさく刻きざんで、一ひとつを一いちど度に、十じふ八はち杯はいばかりを

傾かたむけ盡つくして、漸やつと沈しづむ。此この間あひ約ひ十分間じつぶんかん。恚かうまで大たい切せつにす

ると云ふのが、恩人の遺兒でも何でもない、我が兒なのである。

揚場の奥方は、最う小児の方は安心なり。待くたびれた、と云ふ風で、例の襟を引張りながら、白いのを又出して、と姿見を見た目を外らして、傍に貼つた、本郷座の辻番附。ほととぎすの繪比羅を見ながら、熟と見惚て何某處の御鼻屑を、うつかり指の尖で一、寸つゝく。

「さあ、飛込め、奴。」

で、髯旦の、どぶりと徳利を抜いて出るのを待兼ねた、右の職人、大跨にひよい、と入ると、  
「わつ、」と叫んで跳ねて出た。

「堪らねえ、こりや大變、日南水だ。行水盥へ鱒が湧かうと云ふんだ、後生してくんねえ、番頭さん。」

と、わななく震へる。

前刻から、通口へ顔を出して、髯旦のうめ方が、まつ其の通り、小兒の一寸に水一升の割を覗いて、一驚を吃した三助、

「然も然うず、然もござりませうぞや。」  
 と情ない聲を出して、故と遠くから恐々らしく、手を突込んで、颯と引き、

「ほう、うめたりな、總入齒。親方、直ぐに湯を入れます。」  
 と突然どんつくの諸膚を脱いだ勢で、引込んだと思ふと、

髯ひげがうめ方の面かた當つらなり、腕うでの扱しごきに機關ぜんまいを掛かけて、爰こゝを先途せんどと熱湯ねつたうを注つぎ込こむ、揉もみ込こむ、三助さんすけが意氣湯煙いきゆげむりを立てて、殺さ氣つき朦も々うとして天てんを蔽おほへば、湯船ゆふねは瞬またく間まに、湯玉ゆだまを飛とばして、揚場あがりばまで響ひび渡きわたる。

「難ありがて有え。」

職人しよくにんは、呀や、矢聲やこゑを懸かけて飛込とびこんだが、さて、童わつぱを何どうする。

「奴やつこ、入れ、さあ、何なにが熱あつい、何なにが熱あついんだい。べらぼうめ、弱よわい音ねを吐はくねえ、此この小僧こぞう、何どうだ。」

「うむ、入はひるよ。」

と言いつたが、うつかり手ても入いれられない。で、ちよこんと湯船ゆふね

の縁へ上つて、まいくつぶり 蝸牛のやうに這はひまはる。が、飛鳥川の淵あすかがは

は瀬と成つても、此の湯はなかくぬるくは成らぬ。

唯見ると、親父は湯玉を拂つて、朱塗に成つて飛出した、が握にぎりぶと 太な蒼筋を出して、脛すねを突張つて、髯ひげだん 且の傍に突立つ

た。

「誰だと思ふ、鼻が長の煩でなけりや、小兒なんぞ連れちや來ね

え。恁う、奴、思切つて飛込め。生命がけで突入れ！ 汝に

や熱いたつて、父にはぬるいや。うぬ勝手にな、人様に迷惑

を懸けるもんぢやねえ。うめるな、必ずうめるな。やい、こんな

湯へ入れねえぢや、父の子とは言はせねえ。髯の兒にたゞつくれ

るぞ、さあ、入れ。骨は拾はい、奴。」

と喚くと、縁を這りく、時々倒に、一寸指の先を  
 入れては、ぶるくと手を震はして居た奴が、パチヤリと入つて、  
 「うむ、」と云ふ。中から縁へしがみついた、面を眞赤に、小鼻  
 をしかめて、目を白く天井を睨むのを、熟と視めて、  
 「豪え、豪え。其でもぬるけりや羽目をたゝけ、」と言ひながら、  
 濡手拭を、ひとりでに、思はず向顱巻で、切ない顔して涙  
 をほろくと溢した。

「それ、ぢやぶく、それ、ぢやぶく、」と髯旦は傍で、夕  
 オルから湯をだぶり。

堪へ兼ねて、奴が眞赤に跳ねて出る。

「やあ、金時、足柄山、えらいぞ金太郎。」と三助が、

飛とんで出でて、

「それ、熊くまだ、鹿しかだ、乗のんなせえ。」

と、奴やつこの前まへの流ながしを這はつた。

髯ひげはタオルから湯ゆをだぶり。

「それ、ぢやぶく、それ、ぢやぶく。」

あことらう事ことか、奥おく方がたは渦うづままかゝる湯ゆ氣げの中なかで、芝居しば居ゐの繪ゑ比ひ羅らに  
 頬ほをつけた。

明治四十二年十二月





# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「錢湯《せんたう》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 錢湯

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>